



9月4日、550年振りに北野天満宮で再興された北野御靈会では、延暦寺と北野天満宮が共に新型コロナウイルス禍の終息を祈った（詳細は見開き面にて特集）

明治二（一八六九）年には版籍奉還が行われた。日本が近代国家となるべく大きな一步を踏み出した頃である。大正二（一九一三）年には大正政変が起こった。国民運動が時の内閣を退陣へ追いやつた最初の例である。昭和二（一九二七）年には金融恐慌が発生した。その後に発生した世界恐慌や金解禁の影響も重なり、日本経済は昭和恐慌の様相を呈した。平成二（一九九〇）年は議会開設百周年の節目であった。現在の議会運営は先人の眼には如何に映るのか。と、ふと思う。人が試練と向き合う時、支えの一つとなるのが神仏の存在であろう。人は救いを求め、自らの心と向き合ながら寺社に向かうのである。つまり、寺社に赴くことは、自らの心と向き合う行為である故に大事なのである。しかし、今求められている「新しい生活様式」は寺社への参拝にも変化を促しているようだ。そればかりか、「死者を弔う」葬儀についても、さらに、「学び」の形すら変更を余儀なくされているのである。

比叡山延暦寺は、祈りの場であると共に学びの場でもあった。度々都に蔓延る怨霊、源平の争乱、鎌倉幕府の誕生、元寇。これら未曾有の試練を強いられた時代に、救いを求めた人々の要求に答えるべく誕生したのが新仏教である。その開祖の大半は延暦寺で学んだ僧侶であった。切磋琢磨し、学んだ日々であつたろう。社会は人と人との繋がりで成り立っている。学びに最も必要であるのは、人と人との触れ合いではなかろうか。それも現状は許さない。「リモート教育」は新しい学びの形なのかもしれない。しかし何か違う。違う何かなのである。たとえ、「リモート参拝」なるものが出現したとしても、それもまた違つ何かなのである。「ウイズコロナ」の先にある社会が如何なる社会となろうとも、祈りの場、学びの場である延暦寺であることを願う。そして今はただ、ひたすらに祈りを捧げよう。明日の社会のために。

## 試練を超え明日のために祈ろう



発行所  
比叡山時報社  
□jihoh@deluxe.ocn.ne.jp  
〒大津市坂本町4220  
郵便番号 520-0116  
電話 077-578-0001  
振替 00970-2-9732  
宗教法人延暦寺事務所  
定価 1部110円 年1200円

### 延暦寺広報

#### 会報

年度会費（3000円）中に会報（比叡山時報）購読料を含む。

令和2年比叡山から  
惜しみません  
不

發信する言葉



こちらから  
ご購読は

新型コロナウイルスとの共存を模索する日々が続いている。令和二年はコロナ抜きには語ることの出来ない一年となりそうだ。何の気なく「改元後の二年」を軸に日本の歴史を振り返ってみると、『試練』の二文字が浮かんでくる。

